

『グローバル教育コンクール2010』
～” A-Style” アフリカ・スタディーツアー2010～



ウガンダ児童保護施設で子供とふれあう秋商生

秋田市立秋田商業高等学校

「国際協カレポート」部門

“A-Style” ～アフリカ・スタディーツアー～

2

ユネスコスクールになることで以下のような広がりが生まれてきた。

- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 1 世界のユネスコスクールの活動情報の提供 | 5 HP を通した情報交換 |
| 2 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加 | 6 ワークショップ、研修会への参加 |
| 国際交流の機会の増大 韓国・中国等海外との教員交流 | 7 国内の連携強化 |
| 3 世界の教育事情、国連機関の活動の把握 | 8 国内の関係機関との連携教科 |
| 4 ESD のための教材・情報の提供 | |

実際に、ユネスコスクールに加盟することで、これまでは難しかった他校との交流や、勉強会などの情報が得られ、参加も容易になった。

II アフリカ理解教育、そしてアフリカスタディーツアー

<これまでの考え方>

高校生は目の前に進路選択が迫り、人生の大きな決断を迫られる時期のなかにある。自分のすべき事、必要なことに気づくのは容易ではない。しかしながら、生徒が比較的興味を抱き、少なからず関わりたいと考えている「国際理解・国際協力活動」という媒体を通じて「自分を見つめ直す」「現在の自分に必要なものを発見」するなど、「自分の可能性を広げる（→自己理解・進路実現 やがては自己実現へ）」ことができるだろう。これまでのユネスコスクール班では生徒自らが「私たちにできること」を背伸びせずに実践する活動をコンセプトに進めてきた。では、なぜこれほどまでに「アフリカ」にこだわったのだろうか。

生徒を含め、私たちは恵まれている環境で暮らしている。しかし、ここ数年ユネスコスクール班の活動で世界の实情、環境の実態を学ぶにつれて「アフリカ」は非常に興味深く、魅力ある場所になり、今の私たちの環境は「恵まれている」と言っているのか？と考えさせられるまでに至った。もちろん私だけでなく生徒も同じように考え、同様の疑問を抱くようになっていた。JICA出前講座や様々なイベント、勉強会に参加することを通して、試行錯誤しながらも自らの適性や個性、必要なものに気づき、そこから自分について再考してみる。

「自分が幸せだと思っていたことが、必ずしもそうでないということに気づいた。」

「自分は今、一生懸命に生きているか？」

などの「自分を見つめ直す＝足元を見つめ直す」感覚や思考が生まれてきた。



小学校での出前講座：「食べものはどこからくるの？」世界の食糧事情をわかりやすく説明した。



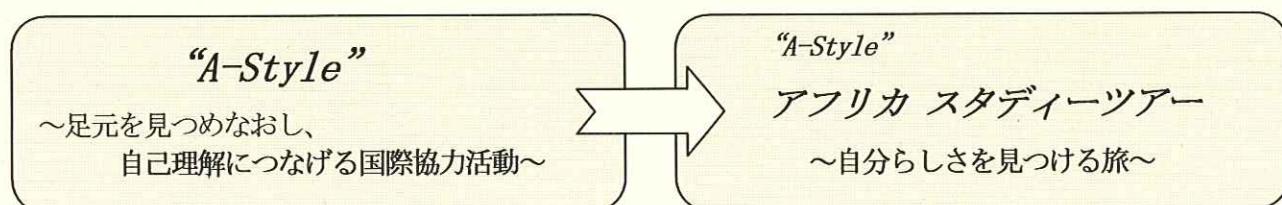
「世界がもし100人の村だったら」を小学校で実施した。戸惑いながらも異年齢の児童への説明に工夫が見られた。

<なぜ「アフリカ」？>

生徒はこれまでの活動を通して「自分について考える＝足元を見つめなおす」所に到達しつつある。世界の現状を知り、世界の中の日本を知ること、自分の置かれている状況を見つめなおす。そこからさらに自分の生活や将来に結びつける流れが生まれてきた。この実践を通し、生徒は自分自身を見つめ直し、自分に何が足りないのか、何を探しているのか、自分とは何であるかを発見することができるようになっていく。同じ時間、同じ講座、同じ活動を共有してはいるが、誰一人として同じ方向に進むわけではない。この活動を通した生徒の成長はそれぞれ違うが、異文化理解を深め、さらにこの国際理解・国際協力活動によって自分自身、自分をとりまく地域社会、取り巻く環境についてより深く理解できるようになってきているということはこの活動の中で私自身実感している。

「あたりまえがあたりまえでない」という現状を実感し、生徒自身に「気づき」を与えることができるのは「アフリカを学ぶ」ことを通してではないかと考え、アフリカ理解を中心に授業を進めてきた。国際協力を学ぶ中で、アフリカを知り、自分を見つめる・・・多感な高校生がアフリカを舞台に国際協力にて学び、感じ、自らの感性で動いていく・・・

アフリカは私たちにとって形のない「教科書」である。アフリカは私たちに「わたし」を気づかせ「わたし」を確認させる何かがあると。そして「A-Style³ アフリカスタディーツアー」で生徒は「自分らしさ」を見つけるきっかけを得るのではないかと考えた。このスタディーツアーは、これまでの学習や取り組み、活動の延長線上にあり、かつ生徒がアフリカの食・産業・環境・人間と交わることで、他との比較の中で、「自分らしさ」を見だし、今後の活動への機動力となると想定した。



Ⅲ「自分らしさ」を探索旅

<「自分らしさ」とは？>

他者との交わりが少なくなったといわれる現代社会。ここ秋田でも少子高齢化がすすみ、農村や漁村では若者がどんどん故郷を離れて都会に出て行ってしまう厳しい状況に直面している。しかも、人口が少ないコミュニティの中でさえ「お隣さん」や「近所のおじさん・おばさん」といった感覚が薄れ、他者との関わりが希薄になっている。「膝を交えて」という表現も現代の子供たちには聞き慣れない言葉となってしまった。以前の日本社会では、たくさんの人と交わり、「他者」のなかに身を置き「他者」と「自分」を比較することで「自分らしさ」を見つけることが可能になっていたのである。

高校生を接していると、考え方、持ち物、行動もだいたい皆同じように感じられる。逆にそうでないと不安に感じるきらいもある。「自分らしさ」を持ち、誇りに感じられる生徒はどれほどいるだろうか。

<訪問の事前指導>

①学習テーマの設定

訪問に先立ち、生徒には学習テーマを設定させ、現地ではどのような手立てで学習・調査するのかを考えさせた。どのテーマもすべてそれまでの学習、出前講座の内容に密接に結びついており、ウガンダでの体験はそのまま

³ “A-Style”のAはアフリカ支援 (Assistance for Africa)、秋田(Akita)からの情報発信、生徒の自発的行動(Action)などを意味し、“A-Style”とは生徒自らの手で、「自分たちにできること」を秋田に居ながら実践し、自己理解につなげる形をあらわしている。

学習事項の確認や、定着につながることにすると予想できるものだった。

生徒のテーマ

「日本とアフリカの食文化の違い」「ウガンダの教育事情」「ウガンダで活躍する日本人」「文化の違い」

②ウガンダ共和国の現地語「ルガンダ語」講座

訪問先では、学生同士の交流を行い、本校の生徒による音楽の演奏、エイズ孤児施設の訪問や青年海外協力隊員勤務校の訪問、マーケット視察、日本人経営の企業訪問など盛りだくさんの内容のため、少しでも有意義に活動を進められるよう「ルガンダ語講座」を開設し、ウガンダ共和国(以下ウガンダ)に2年間青年海外協力隊として派遣されていた元 JICA 国際協力推進員に担当してもらった。また、あわせてウガンダ事情の講座も数回に分けて実施していただいた。

③交流にむけた事前準備

児童保護施設、エイズ孤児施設などの訪問を計画していたため、日本の紹介をするときに役立ちそうな遊び道具などを準備させた。また、リコーダーで奏でる歌の披露も計画し「ふるさと」など数曲を練習した。

<ウガンダ共和国へ>

実際に「目」でみることの重要性は教員・生徒とも実感しているところだった。スタディーツアーの訪問国としてウガンダを選んだのは、同行することになった元 JICA 国際協力推進員が青年海外協力隊員として二年間ウガンダに滞在した経験や土地勘があり、多くの知己がいて、現地語を自由に使いこなせる頼れる存在であったからである。JICA 東北、JICA ウガンダ事務所、秋田県国際交流協会の協力を得て、ユネスコスクール班の教員2名・生徒4名に加え、元 JICA 国際協力推進員、国際教養大学生による「アフリカスタディーツアー」を計画し、実行にこぎ着けることができた。(参考資料2 行程表)

<スタディーツアーが与えたもの>

このスタディーツアーは教員が期待した以上の生徒の「気づき」と「自分のこととして考えるきっかけ」を与えた。多くの生徒がそうであるように、スタディーツアーに参加した生徒ですら「アフリカ」のイメージを「元気がない」「ストリートチルドレンが沢山いる」「衛生面が不安」「危険」などのマイナス的イメージを捨て去れずにいた。アフリカについて学び、自分たちで調査研究して現状を頭ではわかっているが、どこかで「壁」を感じていたはずである。それは、どこからともなく襲う治安の悪さへの恐怖心や、衛生面の不安、そして何と言っても「頭ではわかっていること」が現実に直面したときにもろくも崩れてしまうのでは、という恐怖、本当に現地の人と打ち解けられるか、文化を受け入れられるかなどの不安である。

しかし、スタディーツアーで現地の高校生とふれあったり、児童保護施設の子供たちに日本の遊びを教えることを通して、生徒らはそれまで抱えていた「壁」を取り去り、たくさんの「気づき」を得たからこそ「アフリカの問題」を他人事ではなく「自分のこと」として考え、実践しようとするようになったのだ。

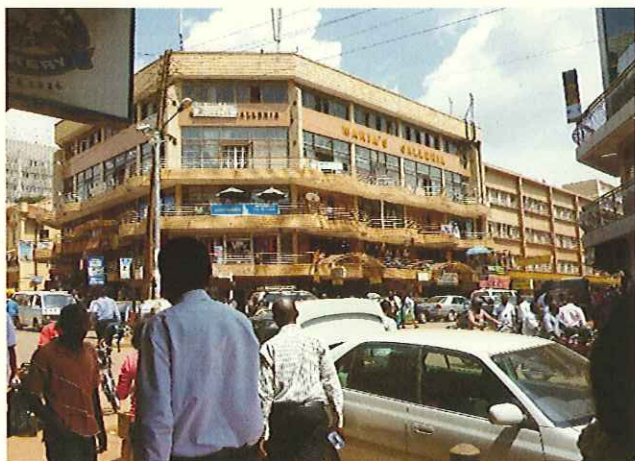
<生徒の気づき①>

現地を訪れて	現地の子供たちの素直さ・無邪気さそして大人の友好的態度を感じて。
生徒が感じたこと	「日本の子供たちに失われているもの」 最近の日本の子どもは背伸びをしていると感じた。 日本では「人」と「人」の関係が薄い←ウガンダの人たちが羨ましく思えた。
新たな行動	地域のつながり、ボランティア活動を充実させようと行動に出た。

また、現地の人たちとの交わりの中で、「日本人」であることを実感し、「自分らしさ」のかけらを見いだした生徒もいた。ウガンダから帰国して書いた作文には「理想の社会がこんなところにあったのか。」と書く生徒もいたほどであった。（参考資料3 生徒作文）を見いだせた喜び、彼女の理想の具現化はまさにアフリカで「他者」との交わりを通して見いだせたのである。

<生徒の気づき②>

現地を訪れて	ウガンダではごみ箱そのものが無いため、ごみや残飯がポイ捨てされていた。
生徒が感じたこと	「排気ガスとごみの悪臭で具合が悪くなった。」 このままポイ捨てを続けていけばより不衛生になるだろう。また、一番被害を受けるのは免疫の少ない子どもとお年寄りだ。 先進国に住んでいる私たちから環境問題を解決させなければいけないと感じた。
新たな行動	ブリティッシュカウンシル「気候チャンピオン」に参加申し込みをして、プロジェクト案が採択された。その後2カ年計画で「気候チャンピオン」としてプロジェクトを立ち上げ、進めている。（参考資料4 プロジェクト案）



都市部では輸入された日本車が真っ白い排気ガスをはき出し往来する。



養蜂に必要な技術（かご作り）を子どもたちから学ぶ生徒

<生徒の気づき③>

現地を訪れて	言葉が通じなくても伝わる。しかし言葉が通じればもっと伝わりと実感。
生徒が感じたこと	活動の中では「言葉が通じなくてもジェスチャーで伝わった」場面があったが、言葉を介してより深い交わりができるのだと身を持って経験した。
新たな行動	「夢の実現のためにも英語が必要となってくるため、日々の勉強を怠らないようにしたい。」 校内行事において全校生徒・来賓の前でスタディーツアーについて英語でスピーチする勇気と行動力が生まれた。また、言語に関しての「ルガンダ語」の“Jebareko（ジェバレコ＝お疲れ様）”に着目。英語には「お疲れ様」の表現はないが「ルガンダ語」には存在し、これは他者を思いやる気持ちの直接的な表現であると解釈。日本とウガンダの言葉の共通性を見いだした。（参考資料5 スピーチ原稿）

<生徒の気づき④>

現地を訪れて	人と人の直接的な関わり合いができるウガンダ人を目の当たりにして。
生徒が感じたこと	日本は便利で、携帯電話やパソコンなどの電子機器で誰かとすぐに通信できるが、それでは培えない、補えない友情や愛情があると感じた。
新たな行動	「便利さ」は必ずしも「幸せ」ではない。 「貧しい」ことは必ずしも「不幸」ではない。 → 自分の生活を見直す。



児童保護施設の孤児らに折り紙を教える本校生徒。普段は何気なくやっていることが「驚き」を与える結果に。



パソコンや携帯電話では培えない人と人との関わり合いができる。

これらの「気づき」、「行動の変化」はこれまで学習したものを確認し、理解を深めるだけにとどまらず、「自分らしさの発見」にむすびつき、かつ生徒自らの自発的行動「アフリカで感じたことを、自分のこととして捕らえ、行動に移す」ことにつながった点で非常に興味深い。

IV グローバル教育の本質

ユネスコスクール班はこれまで国際理解・国際協力活動～「アフリカ理解」を中心に取り組んできたが、同時に生徒の目は環境問題へと向けられている。これまでの取り組みをベースにして地球温暖化を始めとする環境問題とどのように向き合ったらいいのか考えるようになってきている。また、それらを自分たちのおかれている現状、自分たちの住んでいる地域のこととして活動を始めていると言うことである。「グローバル」は「ローカル」な視点と表裏一体なのである。

近年、グローバル教育に携わり、生徒を指導しながら生徒の「行動の変化」「心の変化」を感じている。世界の現状を学び、「グローバル」な視点を持ちながら行動していくことは、すなわち「自分のことを見つめ直し、自分らしさを発見すること。そして、世界の現状を自分の身近な問題と捉え、行動に移すことにつながる」ということである。他者とのつきあいが薄くなり、「物」が大量にあふれかえる現代の日本社会においては他者との比較で「自分らしさ」を探すことが非常に困難になっている。みんな同じような感覚で、個性や特徴がない『「右向け、右」の「仮面社会」』の中で、自分らしさを見いだすことが将来を考えるときにもっとも大切になるであろう高校生に対し、このような体験を通して「気づき」を与えることこそが、グローバル教育の本質ではないか。

今後は国際理解・国際協力活動を通して現在生徒が目に向け、取り組んでいる環境問題についてより深く学ばせ、問題解決に向けて活動をさせたい。これらの活動は、生徒による「自分らしさ探し」を促し、グロ

ーバルな視点を持ちながら、ローカルな活動を展開する「グローカリズム」へと導いていこう。地球規模の問題を自分のことととらえ、自分の住んでいる地域に問題解決の糸口を見いださせるような教育を展開したいと考えている。

現在取り組んでいる、ブリティッシュカウンシルの「気候チャンピオン」に採択された3つの環境プロジェクトは、地球規模の問題に対し、地域から解決しようという動きであり、そのプロジェクトの計画・実践・分析を通し生徒の「自分らしさ」の探求が進んでいくものと確信している。

参考資料2: 行程表

月 日	場 所	時 間	スケジュール・視察内容	宿泊
1月4日 (月)	秋田空港	12:30	集合⇒秋田空港1階JALカウンター前	機中泊
	秋田発	13:50	日本航空(JL1264便)にて羽田へ	
	羽田着	15:00	着後、羽田空港内で夕食	
	羽田発	19:50	日本航空(JL185便)にて関空へ	
	関空着	21:10	着後、国際線ターミナルへ	
	関空発	23:20	エミレーツ航空(EK317便)でドバイへ	
1月5日 (火)	ドバイ着	05:40	着後、乗り継ぎターミナルへ	Cassia Lodge
	ドバイ発	08:25	エミレーツ航空(EK723便)	
	エンテベ着	14:45	着後、携帯電話等を購入	
		15:30	ホテルのバスの出迎え	
	カンパラ	17:00	ホテル到着	
		06:45	朝食	
1月6日 (水)	カンパラ	07:30	ホテル出発	Cassia Lodge
		09:00	JICAウガンダ事務所でブリーフィング	
		10:00	在ウガンダ日本大使館表敬訪問	
	ワキソ	11:00	JICAウガンダ事務所 所長挨拶	
		12:45	鉄本さん宅で昼食	
	カンパラ	14:00	ワキソ県へ移動	
		15:30	地域女性トレーニング事務所見学(～16:30)	
	カンパラ	17:30	ホテル到着	Hotel Brovad
		07:30	朝食	
1月7日 (木)	カンパラ	09:00	ホテル出発、ルカヤへ移動	
	ルカヤ	12:00	昼食(ルカヤ)	
	マサカ	14:30	HDCC(児童保護施設)訪問(～18:00)	
		19:00	ホテル到着	
1月8日 (金)	マサカ	08:00	朝食	Hotel Brovad
	マサカ	09:00	マサカ市内徒歩見学	
	ラカイ	10:00	ホテル出発	
	マサカ	12:00	COTIFONE(孤児支援NGO)訪問(～16:30)	
		17:30	ホテル到着	
		07:30	朝食	
1月9日 (土)	マサカ	09:00	ホテル出発	Holiday Express Hotel
		09:30	青年海外協力隊勤務校訪問	
	カンパラ	12:30	昼食(マサカ)	
		14:00	カンパラへ移動	
		17:00	ホテル到着	
		07:30	朝食	
1月10日 (日)	カンパラ	09:00	ホテル出発	Holiday Express Hotel
		09:30	買い物	
		13:00	昼食(カンパラ)	
	エンテベ	14:00	エンテベへ移動	
		15:00	ウガンダ野生動物教育センター見学(～16:30)	
	カンパラ	17:30	ナミレンベ教会訪問	
		18:00	ホテル到着	

8	1月11日 (月)	カンパラ	朝食 ホテル出発 博物館、マケレレ大学、世界遺産訪問 昼食(カンパラ) ナムロンダへ移動 ナムロンダ農業試験場視察(～15:20) フェニックス社訪問(～18:00) ホテル到着	機中泊
9	1月12日 (火)	カンパラ エンテベ エンテベ発	朝食 JICAウガンダ事務所訪問、買い物 ホテル出発(スペシャルタクシー2台で) 空港着後、チェックイン 空港内で昼食 空港内で買い物等 エミレーツ航空(EK724便)にてドバイへ 着後、乗り継ぎターミナルへ	機中泊
10	1月13日 (水)	ドバイ着 ドバイ発 関空着 関空発 羽田着 羽田	エミレーツ航空(EK316便)にて関空へ 着後、国内線ターミナルへ 入国手続き 日本航空(JL188便)にて羽田へ 空港に隣接するホテルへ	機中泊 羽田エクセルホテル東京
11	1月14日 (木)	羽田発 秋田着	各自朝食 ホテル出発 集合 日本航空(JL1263便)にて秋田へ 到着後、空港にて解散	

参考資料3:生徒作文

組	番	氏名
---	---	----

ウガニダへの想い		
ウガニダに行っ て思っ たことが沢山ありすぎて、何か		
ら書けばいいかよく分かりません。思いついたことをズ	100字	
バスバと書いていきます。拙い文となりますが、頑張っ		
て読んで下さい。		
私がまだ進路が決まっ てない時、担任の先生に「進路		
とスタディ ツアーどっちが大事なの」と叱られました。		
私は珍しく本音と建前っ ていうやつを使い分け、即答。		
「はい、進路です。」彼の中はもちろんスタディ ツアー		
でいっぱいでした。心配をしてくる先生がいるのに、		
本当に自分は嫌な奴だと思っ ますが、やっぱりと不意に		
い早く進路を決めるかよりスタディ ツアーでの経験は自		
分にとって重要だっ たと思っ ます。何かどんな風に影響		
を与えたのか、まだ良く分かりません。でも、とりあえ		
ず私の背筋にそれは表われている気がします。結構、猫		
背気味だっ たのですか、今はピンと背筋が伸びます。何		
を意味の分からないことを…と思っ てもいいかもしれませんが、		
確かに私はそう感じています。クラスの友達にも背が伸		
びたと言われますし。とにかく私は、得体の知らないヤ		
ル気に満ちています。		
その要因の一つは勿論、ウガニダは、自分 が幼い頃夢		
見てた世界だっ たからです。ウガニダに行くと皆、手も		
ふってくれたり、気軽に話したり握手したり、彼らの笑		
顔は人を疑うことも知らないようなキラキラの笑顔でし		
た。日本にはなかなか少ないように思っ ます。ウガニダ		
でも携帯電話やパソコンが普及し始めていますが、人と		
の濃い関係といっ たら、直接的な関係といっ たらは表えてい		
ないと思っ ます。日本はそういう面で寂しいです。私は		
小学生の時からそういうことを感じていて、「みんなも		
っと仲良くなれたらいいのに」と漠然と考へていました。		
ウガニダで過ごしている時、そんな自分の小学校時代を	800字	

100字

800字

Think Globally, Act in Akita (地球規模で考え秋田で行動を)

アフリカへ行ってきたが、ごみ箱がないため、ポイ捨てされている。食べ残しをそのまま平気で道に捨てているため汚い。このまま、続けていけばより不衛生になるだろう。しかし、日本でもごみの分別が十分でないと感じた。そこで、私たちが住んでいる国である日本が理解し、行動しなければならない。そのためには、私たちの地元秋田から発信していかうと考えた。

環境先進国であるドイツ、イギリス、スウェーデンでの取り組みを例として挙げてみる。ドイツでは家庭や学校で環境に対する学習や指導を行っている。イギリスではロンドンに入ってくる車(エコカーを除く)に税金をかけている。スウェーデンに至っては国民の「汚染された社会に住みたくない」という意識から環境への関心が高い。

これらを踏まえて、自分たちが実行していきたいことは環境先進国を見習い、まずは自分たちから家庭や学校でごみの分別を徹底する。さらに近くにある川や海へ行きクリーンナップ活動を行っていく。

毎年行っている小学校での出前授業で、世界の環境に対する取り組みの紹介や、環境に対する意識が低いまま生活をしていると世界はどうなるか、またその解決策として自分たちには何ができるかということを経験の頭で考え行動し意識を高めるということを主な内容にしようと考えている。また、市内約40の小学校にはDVDを作り配布し、小学校で出前授業を実施してもらえるように呼びかける。

また、3Rの他にエコの一環として少しずつ注目されているのが Refuse (ごみになるものを拒絶する)である。主な例として過剰包装をしないことや、レジ袋をもらわないことが挙げられる。そこで、コンビニを利用する機会が多い中学・高校5～10校(秋田商業周辺)の生徒を対象に、レジ袋を貰わずエコバックの利用を推奨するポスターを作成し配布する。ポスターは手書きのため印刷費はかからないし、DVDは自己負担だが、各自300円程度で収まる。両方とも手渡しで配布するため郵送費はかからない。それに郵送するより、手渡しの方が自分たちの思いが伝わると考えた。

秋田商業高校では、「自分を見つめ直す」という点を意識して活動している。実際にウガンダの現状を知り、自分たちは何をすべきかを考え、行動に移していきたい。

考え、行動することで沢山の人の意識が高まれば環境問題が改善できるだろう。まずは秋田で行動を！

「結（ゆい）」

～使い古しのチョークを使用したエコ活動の結と国際協力～

秋田商業高等学校
ユネスコスクール班

【動機】

毎時の授業で使われるチョーク。使おうと思えば数時間は使えるのに、時間ごとに新しいチョークで板書しているのが現状だ。クラスによっては使えそうなチョークを残しているが、ほとんどが捨てられていく運命にある。チョークと言えども資源。私たちはこの儚い運命をたどるチョークに着目し、何かできないかと思い「チョークによる結（ゆい）」をテーマに学習を進めていきたい。

【活動内容】

1 国内の結

I 校内活動

i : チョークの再利用（チョーク再生プロジェクト）

使い古しのチョークを各クラスから集め、粉末にし乾燥させリサイクルチョークを作る。一箱100本入っているチョークがどこまで再利用できるかまた、チョークの無駄についても解き明かすことができるかも知れないという期待。さらに、先生方の無駄についても考える事ができるのではないかな。

ii : チョークの粉末を肥料にしたグリーンカーテンの作成

教室には冷房機器は設備されておらず、夏場の授業は時として過酷な時間となる。そこで、今は使われていない教室脇の花壇を利用してグリーンカーテンを作成する。グリーンカーテンによる室内環境向上により、学習意欲や成績向上に影響があるのではないだろうか。また、今回は2クラスの実施となったので、他のクラスとの比較もできる。

II 校外活動

i : 出前授業の実施

ユネスコスクール班では一昨年秋から秋田市の小学校で高校生による国際理解に関する出前授業を実施している。今回はこれから取り組んでいこうと考えている「チョークを使ったエコ活動」を推進するための授業実践していくことで、小学校という新たな環境でのエコ活動が生まれるかもしれない。また地域の方々にも出前講座に参加していただき環境に対する意識向上に繋がる授業ができれば新たな「結」となる期待が高い。

2 国外との結

I ネパールスタディツアーへの参加

環境に関する地元NGO主催のネパールスタディツアーに1名参加し、現地での活動を補助する。その際、リサイクルチョークを持参し、訪問先で配布する。また配布に止まらずにリサイクル法を伝授することにより、持続可能な協力になることを期待している。

II 参加後の発展

こうした国内外での「結」の構築により新たな行動が生まれれば、私たちの行動も持続可能なものとなる。そしてスタディツアーに参加後新しい取り組みができればこの企画にリンクした形で実践をしていきたいと思う。

気候チャンピオン2010 プロジェクト案

「ひまわりプロジェクト」

1) 目標
地球温暖化の要因の一つである二酸化炭素の削減を目標に、私たちの学校で実施できる活動を提示、行動する。学校全体で取り組むことで、一人ひとりの環境問題への意識を高める。
2) 具体案
学校の敷地内または道路際にひまわりを植える。6月初めに種をまき、7月中に育て、7月中旬から9月中旬に開花する。種を採取し、ひまわりの種から種油を搾油する。ひまわり油は干した種から中の胚乳を取り出し、専用の機械を使って圧搾し、更に目の細かいフィルターで何度か濾して不純物を取り除いて作る。 ※1AKISHOPで連携している近隣の小・中学校にも呼びかけ、ひまわりを植える作業・種を採種する作業を一緒に行う。とれた油で手作りのキャンドル、ひまわり油をAKISHOPで販売、近隣の小・中学校の生徒たちとの調理実習で活用する。
3) 効果
ひまわりを1本植えると0.6kgのCO²の削減。全校生徒分(約720人)を植えた場合、720人×0.6kg=432kgのCO²の削減をできる。 ひまわりは連作障害といった土に悪影響は出ず、約3か月で育つため、自分たちの手で育てられる。グリーンカーテンとしてCO²を減らし、ひまわり油を使うことで無駄のない循環的な活動ができる。ひまわり固有の黄色のカラーが学校全体を華やかにする。
4) 人々への影響
学校全体で取り組む活動なので、高校生から小学生までの子どもが楽しく環境問題の改善に取り組めて、環境問題に関心を持つ。また、グリーンカーテンとして使うことで、周辺地域にも自分たちの活動を広めることができる。
5) 今後への持続
1年間を通した活動で、学校行事としても毎年行うことができる。また、ひまわりを育てる以外に、他の行事に用途を広げることで循環的に、かつ持続的な活動を行うことができる。

※1AKISHOP

秋田商業高校で毎年行われるビジネス実践。

授業で学んだ知識を活かして、公共の場で模擬的に仕入から販売までの活動を、生徒を中心として行う行事。

90周年記念式典 生徒発表原稿

「ウガンダと日本」

秋田商業高校 藤田 真由美

2010年1月、私たち秋田商業高校の生徒4名、同行者4名はアフリカ・ウガンダ行きスタディーツアーに参加しました。私たちは総合的な学習の時間に「ビジネス実践」を実施しています。その校内組織の一つに「ユネスコスクール班」があります。この班ではここ数年A-styleと呼ばれるアフリカ理解・支援のための活動を行ってきました。今回のアフリカ・スタディーツアーはこのような活動の延長線上にあります。1月4日からドバイ経由でウガンダに向かい、14日までの10日間研修を行いました。

ウガンダは東アフリカに位置し、平均標高1100m、日本との時差は6時間あります。平均気温は一年を通して20度を超えています。

日本を旅立つまで私はアフリカにあまり良いイメージがありませんでした。アフリカと聞くと、発展途上国で人々は暗く貧しい生活をしていると想像していました。他にも、車もなくストリートチルドレンが多くいるなど、どれもマイナスなことばかりでした。

ウガンダに到着して最初に驚いたことは、日本車が走っているということです。ウガンダでは約9割が日本の中古車を輸入しているそうです。ここで既に私のイメージとは大きく違っていました。車のほかには、町では信号や横断歩道がほとんどありません。したがって道路を横断するときは車の切れ目を見て、手で車を止めるような動作をして渡るしかありません。クラクションも挨拶代わりに頻繁に鳴ります。到着早々ウガンダの洗礼を受けました。

町の様子は、都市部では先程述べたように車が走り、高層ビルが建っていて人々が溢れていました。ビルは秋田より高い建物が建ち並んでいました。そして秋田より大勢いました。暖かい気候もあって、家の外に出て作業をする人が多く、とても賑やかでした。今の秋田や日本では見られない光景だと思います。

ウガンダに行って辛かったことは、自分が英語が話せないということでした。ウガンダの公用語は英語です。現地の「ウガンダ語」も少し習いましたが、大抵の会話は英語でした。私は英語があまり得意ではありません。買い物に行っても何を聞かれているかわからない上、自分が話したくても言葉が全く出て来ません。一人では会話すら出来ませんでした。言葉が通じることの安心感を思い知りました。

しかし、同時に「言葉が無くても分かり合える」ということを気づかされました。矛盾しているようですが、これは先輩方を見て思ったことです。日本にいたとき、自分がどれ

ほど言葉に頼ってコミュニケーションを取っていたのかを知りました。口先だけで分かり合えた気になっていたのではないかと考えさせられました。先輩方は子供たちと一緒に走ったりジャンプをしたり、言葉が通じなくても仲良くなっていました。分かり合うということは言葉ではなく心が重要だと学びました。

強く印象に残っているのはウガンダの人々です。ウガンダは明るくて優しい人ばかりでした。移動のバスから手を振ると、年齢も性別も問わず笑顔で振り返してくれました。ここでも私のイメージとは大きく違いました。日本の便利さを基準に考え、それより不便だと、不幸でかわいそうだと決めつけていました。しかしウガンダの人々は「外国人」である私たちにも手を振り返してくれます。ウガンダ語で「ジェバレコ」という言葉があります。日本語で「お疲れ様」という意味です。英語には「お疲れ様」という表現はありません。この「ジェバレコ」という言葉も、ウガンダの人々の温かさや人を思いやる心が出ているのではないのでしょうか。

グローバル化が進み、これから日本人がアフリカの人々を相手に貿易を行う機会も増えてくると思います。その際にはアフリカの人々の姿を、ありのままに知ること、そして国際共通語としての英語を身につけることが重要だと思います。私たちユネスコスクール班はフェアトレード、つまり公正な貿易について学習してきましたが、先進国側が一方向的に儲けるような貿易ではなく、先進国側と途上国側の両方が平等に利益を上げることができるような貿易や商業のあり方を考えていくことが大事だと思います。

私はこのスタディーツアーで自分がどれほど先入観を持っているかを思い知りました。テレビや新聞で取り上げられたことをその国のすべてだと思い、自分の中で勝手にアフリカを作り出していました。しかし実際は明るくて優しい人々に囲まれた国です。日本の中で考えて決めつけた印象に捕らわれるのはもったいないような気がします。以前の私のような人はまだ多いのではないかと思います。マスコミの情報だけが全てだと思わずに現地へ目を向けてみると、人生が変わるのではないのでしょうか。

このスタディーツアーでの経験は一生の財産になると思います。これからは世界に目を向けて国際的な視野の持てる人間になりたいです。そしてウガンダへ帰り、少しでもウガンダやアフリカの人々のためになりたいと思います。

The Pearl of Africa

In January 2010, we four students from Akita Commercial High School participated in a study tour in Uganda, Africa. During our comprehensive studies we have a "Business Practice." We are part of the UNESCO group, one of the organizations of business practice. These last few years, we have helped to understand and support Africa. We call this project "A-style."

For example, every year we visit elementary schools. Here we share the knowledge we learned about international cooperation to other students. There is a link between this and our Africa study tour. We wanted to confirm what we learned about Africa with our own eyes. And we thought about how we could get some ideas through various activities. In the end, we decided to visit Uganda for 10 days.

Before we left Japan, we did not have a good image of Africa. If we heard the word "Africa," we imagined a poor, developing country. Also, there are no cars and many children in the streets. There were only negatives.

Uganda is in the east of Africa and the average altitude is 1,100 meters. The time difference is 6 hours. The average temperature is above 20 degrees. The title "Pearl of Africa" comes from Winston Churchill. He thought Uganda was a beautiful country with good farming and gave Uganda this name.

After we arrived in Uganda, the first thing that surprised us was when we saw Japanese cars on the streets. About 90 percent of the cars in Uganda are old cars from Japan. Already, our image changed. But these cars cannot be sold in Japan because of the dirty exhaust that comes from them. This increases the fear of global pollution. And, because of smuggling, there are cars that are not maintained well.

The Pearl of Africa

2

Also, there are almost no traffic lights or crossings, so when we crossed the road, we waited for a gap in traffic and signaled cars to stop with our hands. Many people often honked their horns. Soon after arriving, we were introduced to the real Uganda.

As for the cities, like I said before, there are many cars, skyscrapers and people in the streets. There were buildings all in a row, taller than those in Akita. And there were more people in the city as well. The climate was warm and lively with people working outside their houses. I think you can't see this in Akita or Japan.

One tough thing was when I couldn't speak English well. Uganda's official language is English. I also learned a little of the local Ugandan language, but most of my conversation was in English. I think I'm not that good at English. When I went shopping, I couldn't understand what I was asked, so even if I wanted to speak, I couldn't say anything. I couldn't even talk by myself. It made me realize the sense of security I have when I can understand a language.

But at the same time, I realized that I can understand a lot even without words. You may not understand, but this is something I thought when I saw my senior classmate. When I was in Japan, I knew how much I depended on words to communicate. It made me think about how much we understand by only using our mouths. My senior classmate was running and jumping with children, making friends even though their languages are different. I learned that understanding is not only about words, but also one's heart is also important.

The will truly remember the people of Uganda. They were all cheerful and nice. When I waved my hand from a moving bus, the women, men, young

The Pearl of Africa

3

and old would give me smiling faces. This was VERY different from my original image. Using Japan's convenience as a standard, I decided all by myself that Uganda is not as convenient or lucky as Japan. But, the people of Uganda gave kindness to us, foreigners in their country. There is a word in the Ugandan language called "Jyubareko." In Japanese, we say "Otsukaresama." In English, there is no phrase for "Otsukaresama." I think maybe this phrase "Jyubareko" shows the kindness of the Uganda people and their caring hearts.

With globalization, I think there will be more chances for Japan to trade with the countries of Africa. When we do, we really should know its people, and as an international language, learning English is very important. Our UNESCO group learned about Fair Trade. But I think it is important to think about a better way of business. This better way of business is so that not only advanced countries make a profit, but for both advanced countries and developing countries to profit equally.

Thanks to this study tour, I realized all the one-sided ideas I had. I had made my own Africa by only looking at TV and newspapers. But the real Uganda is a country with many nice, cheerful people. We can't think about what is only inside Japan. That would be a waste. I think there are many other people who think like I did. I think you can't believe in only the mass media, and if you visit the actual places, then maybe you will change too.

I think this study tour experience can be a great treasure. Now I want to become someone with an international point of view. Finally, I want to return to Africa and Uganda and help the people there.